

医学部 看護学科(論文) 問題解説

□■ 出題意図・評価方法・評価ポイント

- 〔Ⅰ〕 課題文は、松永正訓の著書『運命の子 トリソミー』の一部である。出題範囲は、平均生存期間が1年未満の染色体異常疾患を有する朝陽君が誕生し、極めて重い障害を受け入れた両親の心情の変化、限りある命の捉え方、自宅での子育てが表現された場面である。看護職を目指す受験生に生命倫理、家族の心情への理解、問題意識、表現力、論理的思考を問い、総合的に評価する。
- 〔Ⅱ〕 課題資料は行動変容の一種であるナッジの手法を用いて急性呼吸器感染症に対する抗生物質の不適切処方率を軽減した研究結果の一部である。医療専門職・患者関係は、パターンリズムから説明と同意を基本とした患者中心の医療に変化しつつある。また、パターンリズムに見られるような直接的で一方的な指示は、当事者の主体的な行動変容に結びつきづらいとも言われている。近年、当事者の主体的な行動変容を促す方策として、ノーベル経済学賞を受賞した米国シカゴ大学のリチャード・セイラー教授が提唱するナッジなどの手法が注目を集めている。横浜市は全国に先駆けて地方自治体発のナッジユニット「横浜市行動デザインチーム」を立ち上げ、本学とも複数の事業を推進している。本問では、ナッジの手法を用いた研究結果を例示し、受験者の図表読解能力に加え、当事者の主体的な行動変容に対する受験者の認識および洞察力の深さを問う。本学看護学科生には、「関係職種や地域住民とも連携して、地域社会のあらゆる人々の健康や生活の質の向上に貢献する」ことが求められており、行動変容に対する知見は学生が備えるべき資質の一つである。問1では、14のクリニックの医療専門職、およびそこを受診する患者がポスター掲示群と非掲示群に割り振られたこと、ポスター掲示群では不適切処方率が9.8パーセントポイント減少した一方、非掲示群では9.9パーセントポイント上昇し、介入の効果が見られたことを読み取らせる。問2では、本研究におけるポスター掲示は、患者への啓発効果だけでなく医療専門職への啓発効果が期待されること、双方に働きかけることで患者や家族の安心のため処方しておこうという医療専門職の判断や薬を処方してほしいという患者の期待や要望に働きかけることができ、相乗作用が期待できることを読み取らせる。問3では、行動変容に関わる既存の保健医療上の問題を一つ挙げさせることで、受験者の保健・医療・福祉に関する日頃の問題意識を問う。さらに、その問題への解決策を例示させることで、患者と医療専門職双方への働きかけが相乗作用を生む、介入が低コストであり費用対効果が大きい、一方的な指示ではなく患者と医療専門職の協働を促す内容で患者へ不快感や抵抗感を与える危険性が低い、といった本研究の行動変容の手法を実際の問題へ応用させる力を問う。